

「ここ、いかにも川じゃないですか」

加藤さんがつぶやいている。

加藤さんと僕は水の痕跡をみつけてまちを歩くことに快感を覚え始めている。

「この路地なんだか妙にくねってる^一」加藤さんが付け足す。

この路地はいまも付近一帯の大きな下水道として機能しているようだ。

「いまも地下で轟々と水の音^二がしてますよ」^三と僕が応じる。

「それになにこれ、舗装が平坦じゃないよね。傾いてたり、あちこちでこぼこ^三だし、道の幅もなんでこんなに不規則^四なん？」

我々の眼は、小さな川を埋め立てたらしい微かな痕跡も逃さない。

品川区の武蔵小山から林試の森に続く路で、昔の品川用水がつくりあげたまちのコミュニティ感と、それを完全に無視して分断する現代の都市開発が拮抗^五する現場に遭遇して以来、まちをみる眼が進化したのだ。

ここは、早稲田と神楽坂のあいだにある無名のまちである。

南北に走る外苑東通りのすぐ西側に、通りとほぼ平行してくねりながら続く路地がある。それを手繰るようにいま加藤さんと僕は歩いている。この路地はいわゆる谷道^六で、外苑東通りの東側は、神楽坂につながる台地が急にせりあがっている。路地の西側は緩やかな丘を形成していて、その中腹あたりには漱石が晩年住んだ敷地跡に記念館としての草庵がある。

――

一 谷筋の路地を歩いているときのふたりの会話。道の蛇行はそこがかつて水路であったことのひとつの痕跡である（型ことば 17 番）。

二 その路地は耳を澄ますまでもなく、水音が轟々と鳴り響いていた。かつての水路を埋めた道では、多くの場合、耳を澄まさないと言音には気づけないかもしれない（型ことば 13 番）。

三 かつての水路を埋めた舗装はなぜだかどこことなくこぼこなのである。この路地だけでなく多くの道で気づいた発見なのである（型ことば 16 番）。

四 かつての水路は、幅が不規則に変わる妙な道になっていることが多い（型ことば 15 番）。

五 まちの今昔比較を意識的に行えば、まちを「観る」眼が養われる。かつてのコミュニティ感を無視するような都市開発にも、「観る」眼がないと気づけない。いろんな不自然さに敏感になりたいものである（型ことば 3 番）

六 そこは、くねりながら、幅も不規則に変わりながら、湿った空気の流れを少し頬に感じる、何の変哲もない谷筋の路地だった（型ことば 14 番）。

東西線でとなりの駅である早稲田と神楽坂がどうつながっているのかを探るためにふたりで歩き始めた。両駅を結ぶ直線上には、実はコミュニティのつながりは全くないこと、そのあいだには「無の地」が存在すること、そしてまさにそこに漱石の晩年の住処があったことを発見するに至ったのである。明治時代の神楽坂は早稲田文人の集う地であった。ここは早稲田でも神楽坂でもない。晩年の漱石がなぜこの地を選んだのか？　それが僕と加藤さんの関心事なのだ。

むかし川や用水だった谷道は、湿気を含んだ風^七の通り道であることが多い。半年に及ぶまち歩きで、加藤さんと僕の身体はそんな痕跡も知覚するようになった。

「微かに風も感じます^八よね」と僕。

応じるように加藤さんが何かつぶやいたが、その言葉は風でどこかに運ばれ僕には届かず、西日を浴びた彼の姿も幻影のようにかき消えた。

* * *

お寺の匂いが漂ってきた。

二町ばかり北にある弁天町のお寺だ。

香を炊く匂いや、境内に立つ朝市^九の魚や野菜の入り混じる匂いを、川面を流れる風がときおり丘の中腹まで運んでくる^{一〇}。

私はいま、午前最後の太陽を浴びてテラスに佇んでいる。

前庭が川まで緩やかに傾斜^{一一}している。

――

七 谷道は台地に比べると湿っぽい。特にこの路地は曲がりくねって視界もスパッと通らない地道で、淀む感じはないが湿り気を帯びた空気が流れる場所だった（型ことば12番）。

八 注釈六を参照のこと。

九 漱石晩年の住処の東側の通り（現在の外苑東通り）は、古地図によれば少し北側で直角に東に曲がる街道だった。そこは現在は弁天町という交差点で、西に進めば早稲田に繋がる大きな十字路になっている。道が直角に曲がるのは近くに大きな神社仏閣があつて賑わいを見せていたからではないかとわれわれは睨んでいる。（型ことば33番）

一〇 注釈九に書いたような賑わいを示した場所が近くにあれば、水路に沿って流れる風は様々な匂いを運んでいたに違いない。嗅覚は人を環境に拓かせる（型ことば11番）。

一一 漱石晩年の草庵の場所には現在小さな展示の館がある。住んでいた家は東向きだったらし

向こう岸の、神楽坂に続く東側の台地は、早朝は朝日の逆光で霞んで見えないのだが、いまは右に回り込んだ太陽に照らされ輝き始めている。

今朝は珍しく気分がよかったので弁天町の朝市をひやかし、意味もなく川沿いの草むらを散策した。昨日の夕方から夜半まで降っていた雨に川は勢いを増し、ごおごおと渦を巻いていた。

「渦を巻いて流れる日は、どじようが穫れやすいのよ」

体調がすぐれず引きこもりがちな私に、時々どじようを届けてくれる近所の親爺^三が以前そう言っていた。

ここの町名は早稲田南町である。川から登ってくる路をそのまま辿れば、早稲田までそんなに遠くはないが、早稲田界限とつながる感覚^三はない。同業の早稲田文人達は神楽坂で集っては、やれ日本がどうの世界がどうのと血気盛んに酒を飲んでいるらしい。連中は早稲田から神楽坂までどの路を歩くのだろう？ 少なくともこの地を通るとい話しは聞かない。早稲田大学の眼は本質的に神田川に向いている^四。神田川を下れば飯田橋。その横にある山が神楽坂のまち。早稲田は神楽坂とそんなふうにつながっているに違いない。

ここも神田川には一応つながっている。川をまっすぐ北に下れば、弁天町のお寺の脇を抜けて神田川まで四町である。

「先生、遠いですよ。なんでこんなところに住まわれているのですか」
週に一度だけ訪ねてくるなじみの編集者は、よく愚痴をこぼす。

—
く、前庭のあたりから水路に向かって傾斜し、水路の向こう岸には通り（現在の外苑東通り）を挟んで神楽坂に繋がる台地の崖が見えていたはずである（型ことば³⁷番）。

二一人は水を求めて集まり、そこにコミュニケーションが生まれる。どじようを届けてくれる親爺と漱石のあいだにこんな会話が交わされていたかもしれないと、漱石の生活に想いを馳せてみた（型ことば²⁷番）

三早稲田大学から漱石の草庵までは、実は細く長い小径で繋がっている。アップダウンのある小径であるが、途中で道幅が太くなったり細くなったりする。道幅の不規則な変化は、道に沿って延びるコミュニティ感をそこで断つアフオーダンスをもつのではないか？（型ことば³¹番）
四神田川は目白台地の南側を東西に流れる。そして神田川の南側に少し入り組んだ低地に早稲田大学がある。早稲田と漱石の草庵もほぼ東西方向の関係にある。注釈十三にあるように、早稲田からみれば漱石の草庵に向かって小さな丘が横たわる。それに対比するかのようには、神田川へは低地のまま繋がっている。まちが向いている方向は地形で決まっているのかもしれない（型ことば⁴⁸番）。

「こんな無の地にひっこんでいるから、謳いの声もしよぼくれちゃうんですよ」私を元気づけようと忘れた頃に訪ねてくる虚子も、前に来たときそう言っていた。虚子は謳うのが好きで、合わせて謳えと強要するからかなわない。

ここは無の地である。それが気に入って引越して来た。

早稲田と神楽坂のあいだに位置していながら、そのどちらでもない。どちらとも直接のつながりは薄い。特にこれといった特徴もない。

ただ川が流れ、小さな丘に^{二五}背後を守られ、夕方には東側の台地^{二六}が残照に染まり、お寺の賑わいを抜けて北に進めば神田川につながる。世の喧噪からは離れ、でも小心者だから細いつながりは残しておきたい。そんな私にこの地は合っている。

台地にはある種の寂しさ^{二七}がある。

神楽坂の山も賑わいを見せている場所はごく一部で、少し離れると急に寂しい。水がないからなんじゃないか？ この地に住み始めてそう気づいた。人間は水を求めるのだ。川の音を聴き^{二八}、川の風が運ぶ街の匂いを嗅ぎ^{二九}、川面を散策することを身体が欲している。

早稲田が神田川を向いているのも似た理由からかもしれない。

それにしてもきょうの風は湿気を帯びている。

遠く神田川の湿り気を運んで来るのか、単に夜半までの雨のせいかな。

雲雀の声が聴こえる。東側の台地の空を舞っているはずだが、姿は見えない^{三〇}。

――
^{一五} 注釈十四を参照。

^{一六} 水路の向こう岸の台地（神楽坂に繋がる台地）の手前には、その台地を背にするお寺があり、それは漱石の暮らしていた昔もあったようだ。台地を背にするお寺は、低地の意識をそこに縛り、低地から台地への繋がりを希薄にするのではないかな？ 毎夕残照に染まる崖を眺めることで台地への想いは募るのかもしれないが（型ことば 49 番）。

^{一七} 神楽坂に繋がるこの台地を歩いたとき、筆者は、台地特有の乾いた空気と、水にまつわる低地の活気からは無縁の一種の寂しさ（それは静けさでもある）を感じた（型ことば 35 番）。

^{一八} 水の音は人を引き寄せる。音への知覚は、とかく視覚優位で情報をキャッチしがちの人間が、自分の身体性を強く意識するきっかけになる（型ことば 13 番）。

^{一九} 注釈十を参照。

^{二〇} 注釈十六にあるように、前庭に向いたテラスに腰掛けて、神楽坂に繋がる東側の台地を眺めては、想いを馳せていたのではないかと推察してみた。

*

*

「やっぱりさあ、訪れる客には一旅させるってのが、漱石の意図だったんじゃないすかね？」

しばらく空想の世界を彷徨っていた僕の耳に、聞き慣れた声が飛び込んできた。我に返ると、加藤さんが同意を求めるように僕の顔を覗き込んでいる。

「・・・そうそう、僕もおなじことを考えてた」